

森鷗外「牛鍋」論

——「本能」とクロポトキン『相互扶助論』

原 貴 子

一

森鷗外の短編小説「牛鍋」は、明治四十二年二月六日の日記に、「牛鍋を心の花に（中略）送る」と記されていることから、この日までには脱稿したと考えられる。その『心の花』第一四巻第一号（明治四三年一月）に掲載され、同年一〇月発行の『涓滴』（新潮社）に収録され、さらに『還魂録』（大正六年九月、春陽堂）に収載された。この間に、わずかな用語の異同はあるものの、意味内容に深く関わるものではないと考えられる。この小説は、夫を亡くした女とその幼い娘が、亡夫の友人である男と牛鍋を食べる場面を描出したものである。男がひたすらひとりで食べ、女の娘が男の隙を見て肉をつまみ、女はそのありようを「永遠に渴してゐる目」で見つめる、という光景が三人称の語り手によって提示されている。

小説「牛鍋」は発表当時、「此人の為に、こんな恠麼淺薄な毆書は試みて貰ひたく無い⁽¹⁾」と、文学者としての鷗外を評価するがゆえにそれ

に相応しくない見劣りのする小説と酷評されたりした。しかし後年、三好行雄は、「鷗外の短篇のなかで、もつとも完成度のたかい傑作だと信じている。ほとんど鮮烈と云つていい印象の短篇⁽²⁾」と絶賛した。ただし一方において、三好が「牛鍋」について語ることの困難を指摘したとおり、その先行研究は決して多くはない。

先行研究において、小説「牛鍋」は、描写と内容の二方面について言及されてきた。まず、描写については、シンポジウムで小堀桂一郎が、明治四二年末頃に発表された鷗外の小説には、「杯」「牛鍋」「電車の窓」といったペーター・アルテンベルク (Peter Altenberg) の散文詩「釣」を模倣した形式の小説と、「独身」という従来の形式の小説の二系統があることを指摘し、「牛鍋」に関して私、写生文と申しましたのは、いま言った文脈での散文詩と言いかえてけっこうだと思ひます⁽³⁾」と述べ、小説「牛鍋」が鷗外における新しい文体の創造であると意義づけている。一方、三好は表現の仕方そのものに小説の主題を見ている。「永遠に渴してゐる目」を具体化する

ことなく、そのはげしい情念の色を読者の眼前に彷彿してみせる——純粋に〈表現〉の領域に属するこの試みこそ、「牛鍋」の真の主題と呼ばれるにふさわしいものかもしれない」と述べ、三好は、女のもつ「永遠に渴してゐる目」の具体を描出していないにもかかわらず、その目のもつ激しい感情を読者に感じさせる表現方法に、内容を凌駕する程の中核性を見出している。

次に、内容については、竹盛天雄が、「本能は存外醜悪でない」などの叙述を「テーゼ⁴」と捉え、それが「この作品の底をかえつつ浅くしている」と批判しながらも、「本能」の「決して暗くない人間の恕されるべき肯定面がとらえられている」と述べている。竹盛は、「本能」をこの小説の主題と捉え、作中人物は「教育のない下層の生活者」であるが、この男には「本能」の肯定されるべき部分が表示していると考えている。三好行雄も、この男と女について、「大工の棟梁か鳶の頭らしい、いなせな職人肌の男と、さほど裕福でもなさそうな、それでいて情熱を隠すことを知らぬ下町の女との対照はすでにあざやかである」とし、この二人を、職人風情の男と下町文化を身にまとった裕福ではない女と指摘する。また、三好は、女の「永遠に渴してゐる目」に男に対する「情念の炎」を看取する。小泉浩一郎は、女の「永遠に渴してゐる目」に着目し「性欲のため」に食欲をも母性愛をも忘れた永遠の女性像⁵を見出す。そして、男については職人らしい格好にもかかわらず書類入れである「折檻」

を所有する点から、「開化」の体現者」「雁」の高利貸末造の先蹤的イメージを見る。有賀ひとみは、上野千鶴子『近代家族の成立と終焉』（平成六年三月、岩波書店）における家族の定義を導入して「共食共同体」を「家族の最小の定義」とし、男と女と女の娘は「牛鍋という「火」を囲む「家族」⁶」と見なす。そして、「経済的困窮」にある「下層の未亡人」の女は、そこから脱することを欲して「〈男〉と法的に婚姻関係を結び、家族となる」「一の本能」を抱くがゆえに、「食欲と性欲」という「他の本能」を犠牲にしたと捉える。さらに「本能」のおもむくままに行動できない理由のひとつが「未亡人」や「母」といった社会的なものによる束縛であるとする。

以上の先行研究では、この小説の表現形式、小説内で言及されている「本能」とは何か、女のもつ「永遠に渴してゐる目」をどう読むか——この三点が主として問題にされている。しかし、このような問題を追究する上でも、まずおさえておかなければならないのは、小説の構造と語り手のあり方であると思われる。小説「牛鍋」は、三人称の語り手による男と女と女の娘の食事風景の描写と、その小説内事態に対する語り手の批評という二種の記述から成り立っている。まずは、あたかも目前で繰り広げられているかのように三者による食事風景が描かれていて、この箇所は写生文と言ってよい描写になっている。その一方で、語り手はこの目前の光景に対して、例えば「四本の箸の悲しい競争」というように、抽象化を伴う語で批

評意識を交えながら叙述していく。そして、小説の進行とともに語り手の批評の度合いが徐々に増していき、小説末尾では、嘯目風景に端を発した「本能」をめぐる思考に語り手の焦点が移行する。そこでは、男の妨害に負けず、箸を伸ばすようになった女の娘に対して「生活の本能」を見出し、食べさせまいとする男を「箸のすばしい本能の人」と認定する。つまり、語り手によって、男と女の娘の牛鍋をめぐる争いは、「本能」の争いとして焦点化されるのである。この枠組みの設定の仕方、語り手の問題意識が表出している。もちろん、食の争いという具体的事象を湧出させた根本的要因に「本能」を見ると、着眼点は、真新しいものではない。しかし、先行研究で指摘されてきた三者の関係性を改めて想起したい。この三者は下層社会に属しながらも、男と女では経済力に差があると見受けられる。男は職人稼業でありながらも何か副業をもち経済力を少しずつ伸ばしつつある様子であり、反対に女は夫を亡くし幼い娘を抱え経済的に苦境に立たされていると考えられるように、貧しさのなかにおいて差異があるのである。そして、三者ともに晴れ着を着用し、女は男に酒を注いでやるなどの気配りを見せるが、男は全く意に介さず、それを当然のことのように受け流してほぼ独善的に食事をしている。これらの点を踏まえると、下層社会に生きながらも経済力を有し始めた男が、亡き友人の妻と娘とに食を与える義務はないものの、二人を手助けするために、それほど高くはない外食牛鍋

に招いたものと考えられる。

こうした三者の関係性とありようから浮かび上がってくる問題がある。それは、下層社会における助け合いという問題である。また、語り手は男と女の娘の行為を「本能」による争いとして提示していた。そうであるならば、小説「牛鍋」には、下層社会における食をめぐる「本能」の争いと、下層社会における助け合いという二つの問題が存在することになる。この「本能」と助け合いに関して、管見の限りにおいて当時の言説状況を確認すると、これらは社会主義者を中心に識者の間で思考が上がったことが判明する。それゆえに、この小説における「本能」と助け合いを当時の言説状況に置いてみることによって、語り手が「本能」の語を用いて三者を分析することの意義が新たに浮上するようになる。本稿では、第一に語り手の思考内容を明らかにし、第二に当時の社会主義者たちが「本能」をめぐる展開していた言説を調査する。それを通じて、この小説の語り手が有する「本能」に関する思考が当時どのような位相にありどのような意義を帯びていたのか、この問題に肉薄したいと考える。

二

牛鍋をめぐる争いにおいて、男が強者として君臨し、女とその娘が劣勢に立っていることは一目瞭然である。そのような関係性のな

かで女の娘が逆襲に出た場面を語り手は次のように焦点化する。

男のすばしこい箸が肉の一切れを口に運ぶ隙に、娘の箸は突然手近い肉の一切れを挟んで口に入れた。もうどの肉も好く煮えてゐるのである。

少し煮え過ぎてゐる位である。

男は鋭く切れた二皮目で、死んだ友達の一人娘の顔をちよいと見た。叱りはしないのである。

「二皮目」とは二重瞼のことで、男はそのはっきりした目元から視線を送っている。これまで男は女の娘が箸を伸ばそうとすると、「そりやあ煮えてゐねえ」と言つて阻止してきた。とすると、語り手が「どの肉も好く煮えてゐる」ことを暴露することは、男の発言が嘘であり、男は単に肉を独占したいためにそのような嘘をついていたことを読者に明かしたことになる。さらに、「少し煮え過ぎてゐる位である」と畳み掛けることは、語り手の男に対する批判と見られる。そして、不覚にも女の娘に肉をくすね取られた男が、どのような反応を見せるかに語り手は注目し、「叱りはしないのである」と記すことから、語り手は、この男は怒るであろうと推測していたことが読み取れる。語り手は自らの予想が裏切られたことから、浅草公園の母猿と子猿がさつま芋を奪い合うことに思いを馳せ、それ

を「悲しい争奪」と嘆きながら次のように述べる。

母猿は争ひはする。併し芋がたまさか子猿の口に這入つても子猿を窘めはしない。本能は存外醜悪でない。

箸のすばしこい本能の人は娘の親ではない。親でないのに、たまさか箸の運動に娘が成功しても叱りはしない。

人は猿よりも進化してゐる。

猿の親子間では母猿が力関係において優位にあり、子猿は劣位に立たされている。その劣勢にある者が芋を獲得しても優勢にある者が抑圧しないことに語り手は注目する。利を巡つて奪い合い優勝劣敗に終わるのは「本能」のなせる業であるが、語り手は、「本能」を負のものとしてのみ見ているわけではない。「本能」は、優勢にある者が劣勢にある者の利益を完全に収奪するのではなく、劣勢にある者による利益の獲得に対して寛容な正の面も有していることに語り手は目を留めている。語り手の認識においては、「醜悪」とは、強者が利を独占することであり、その逆「醜悪でない」とは、強者が抑圧されている側の利益に寛容でそれを尊重することである。そして、「人は猿よりも進化してゐる」と結論する思考回路には、血縁か非血縁かの問題が提示されている。浅草公園の猿の争奪は、母子という血縁関係におけるものであり、小説「牛鍋」における争奪

は、男とその友人の娘という非血縁関係におけるものであり、そこには、肉親と他者という開きがある。男と女の娘の間には血縁関係がないにもかかわらず男が女の娘の利を認めたことは、男が血縁を超えて他者である被抑圧者を助けていることであり、それを語り手は自らが有する、力関係における劣位者への配慮という理念に照らし、「人は猿よりも進化してゐる」と結論づける。このように、語り手には被抑圧者の尊重という価値観が存在し、それを「本能」の問題のなかで捉える視点がある。

さて、語り手は、箸を出す娘と男の関係を如上のように捉えたが、娘の母については、次のように叙述する。

四本の箸は、すばしこくなつてゐる男の手と、すばしこくならうとしてゐる娘の手とに使役せられてゐるのに、今二本の箸はとうとう動かずにしまつた。

永遠に渴してゐる目は、依然として男の顔に注がれてゐる。世に苦味走つたといふ質の男の顔に注がれてゐる。

一の本能は他の本能を犠牲にする。

こんな事は獣にもあらう。併し獣よりは人に多いやうである。

人は猿より進化してゐる。(傍線引用者、以下同じ)

「今二本の箸」とは、「永遠に渴してゐる目」をもつ女を指す。力

関係に差があるとはいへ、男も女の娘も食を得たいという本能は発揮している。しかし、女は食欲という本能の発露させない。それはどうしてか。それを解くために、語り手が捉えた「永遠に渴してゐる目」という表現に着目し、女は何に対して「永遠に渴してゐる」のか、について考えたい。それは以下の引用から推察することができる。

女の目は断えず男の顔に注がれてゐる。永遠に渴してゐるやうな目である。

目の渴は口の渴を忘れさせる。女は酒を飲まないのである。

箸のすばしこい男は、二三度反した肉の一切れを口に入れた。

丈夫な白い歯で旨さうに噛んだ。

永遠に渴してゐる目は動く脛に注がれてゐる。

女の「永遠に渴してゐるやうな目」が眼差まなざしているのは、「男の顔」である。その「男の顔」のうち、「動く脛」を注視している。このとき男は肉一切れを「丈夫な白い歯で旨さうに噛ん」でいるために、その顎は動いている。ということとは、女は、食べるという行為に対して「永遠に渴して」いると考えられる。そもそも諸辞典を参照すると、「渴かつする」という動詞は、のどがかわくこと、物が欠乏すること、欠乏したものを強く求めること、あるいは水が尽きることを

言う。「渴^か」という名詞においても、動詞と同様の意味をもつが、「飢渴」の意味に繋がり飲食物の欠乏を指すこともある。こうした語の意味を踏まえると、「渴してゐる」や「渴」という表現は、水分や物、食料の欠乏を意味すると認定できる。そして小説には、「目の渴は口の渴を忘れさせる」とあり、「女は酒を飲まない」という後続の説明もある。ここから、女には「口の渴」という飲酒への欲望がないので、飲食や物のうち、この飲食する場では「目の渴」という食への欠乏感が前景化していると考えられる。「女の目は断えず男の顔に注がれてゐる」という箇所のみに着目すると、先行研究で指摘されてきたような男に対する「情念」や「性欲」が「永遠に渴してゐるやうな目」の内実と把握される可能性がある。しかし、それでは、女が「目の渴」を覚えながら「男の顔」、特に食事の最中である男の「動く顎」に注視する要因を把握できないように思われる。したがって、「渴」という語の意味と小説内状況を考え合わせると、女が「渴してゐる」のは、食べ物に対してであろう。その目が「永遠に渴してゐる」とは、どういうことか。「永遠」とは時間的な持続に際限がないことを指すので、この女は食べることに於いて、この場だけでなく一生満たされることはない状態にあることを意味していると考えられる。

それゆえ、小説末尾の「一の本能は他の本能を犠牲にする」とは、男の食欲によって、女の食欲が完全に封じ込められたことを意味す

る。そして、語り手は、この食の争いに参加する意欲も喪失させる程深刻に他者を抑圧することが、人間だけではなく獣にもありながらも獣よりも人間に多いと判断した。そのうえで、語り手は、「人は猿より進化してゐる」と結ぶ。論理の流れから言えば、深刻な食の抑圧は人間の方に多いのだから、人間ほど他者を抑圧しない猿の方が「進化」しているとなるべきところである。では、なぜ、「人は猿より進化してゐる」と言つたのか。語り手がそもそも抑圧されている側の利を尊重することに価値を見出していたことを踏まえると、ここにおける「進化」という言葉は「退化」の意に相当する。つまり、語り手は、自らの理念に即して、本来は「退化」と言うべきところをあえて逆に「進化」と言うことにより、劣勢にある者を抑圧する頻度の高い人間という種^{しゅ}を痛烈に皮肉つたものと言えるのである。

三

「牛鍋」という小説には、前節で述べたように、下層社会の人間間における「本能」の争いと下層社会の人間間における助け合いという二つの問題が存在する。そして、「牛鍋」の語り手は、男と女の娘の「本能」による食の争いを「悲しい競争」と嘆きつつも、母猿が子猿と争いながらも「芋がたまさか子猿の口に這入つても子猿を窘めはしない」ことに注目して「本能は存外醜悪でない」と、「本

能」に正の側面があることを提示する。つまり、この語り手は、抑圧者においても被抑圧者においても「本能」のままに利を争うこと自体に痛みを覚える態度を有しており、それと呼応するように、抑圧者が被抑圧者の利を尊重するという「本能」の意外な一面に価値を見出す人物である。

こうした語り手の認識は、小説発表時の言説状況においてどのような位相にあるのか。管見においては、ロシアの無政府主義者ピョートル・クロポトキン (Peter Kropotkin) の著書『相互扶助論—進化の一要素』(Mutual Aid: A Factor of Evolution) (以降、『相互扶助論』と記す)との繋がりを指摘することができる。これは、クロポトキンが亡命先のロンドンで執筆し、一九〇二(明治三五)年一〇月に、ウィリアム・ハイネマン社 (William Heinemann)、マクルアー・フィリップス社 (McClure Phillips) から出版したものである。この著書に収録された評論は、いずれもイギリスの月刊誌『十九世紀』(Nineteenth Century) に一八九〇(明治二三)〜一八九六(明治二九)年にかけて断続的に掲載されたものとなる。『相互扶助論』は好評のうちに読み継がれ、一九〇三(明治三六)年に増刷、一九〇四(明治三七)年には改訂廉価本が刊行、一九〇七(明治四〇)年、一九〇八(明治四一)年、一九一〇(明治四三)年、一九一四(大正三)年と増刷を重ねていった。一九一五(大正四)年には大衆版が刊行され、クロポトキンの「再版の序」が追加され

た。⁸⁾

この『相互扶助論』は、当時社会主義者たちに注目され、発表・未発表の違いはあるものの、幸徳秋水や大杉栄、石川三四郎、北一輝、西川光二郎などが『相互扶助論』に言及している。幸徳秋水は、『時事新報』の企画「内外百書選定」に応じた際に、複数の書目とともに「Mutual Aid. P.Kropotkin」を挙げた。⁹⁾「内外百書選定」とは、様々な分野の第一人者に「国民の趣味と智識を涵養するに足るべき良書二十種以上づゝの指定を乞ひ、集めて其高点を得たるものより順次百冊に及び、之を読書界に薦めんと」したものである。¹⁰⁾また、大杉栄は、巢鴨監獄から堀保子に宛てた明治四〇年六月一日付書簡で、「アナルキズムは、クロポトキンの『相互扶助』と、ルクリユスの『進化と革命とアナルキズムの理想』といふのを読み終つた¹¹⁾と述べている。石川三四郎も、明治四〇〜四一年五月まで巢鴨監獄に投獄されていた際のことを回想して次のように述べている。

進化論に懷疑し始めたのは、カアペンターの『文明論』とクロポトキンの『相互扶助』とを読んだ結果であります。クロはダーウインの進化論の一部面を強調するために『相互扶助』を書いたのであるが、不思議にも、それが私に進化論否定の動機を与えたのであります。あの書を読むと、諸動物間に行われる相互扶助は人間界に行われるそれよりも一層純粹に本能的で

あつて有力であり、その点から言えば、少くとも今日の人間界は或る動物より遙かに退歩したものと云えるのであります⁽¹³⁾

石川は、『相互扶助論』を読んだ結果、相互扶助の実施程度において、動物は人間と比較にならない程進んでいると感じたと言つ。

そうした意味で石川にとっては『相互扶助論』が、人間が進化の最先端をゆくといへる所謂進化論を否定する契機になつたのだと考えられる。注目すべきは、石川の言の傍線部「今日の人間界は或る動物より遙かに退歩したものと云える」という考えと、先に引用した小説「牛鍋」本文の傍線部「人は猿より進化（退化の意——引用者注）してゐる」という語り手の認識とが一致していることである。ここから、助け合いにおいて人間は動物より退化しているという小説「牛鍋」に表れた認識は、語り手独自の認識ではなく、『相互扶助論』を契機とした認識に連なっていると捉えられる。そして石川は、『相互扶助論』と「ダーウインの進化論の一部面」に接続を見る。これは、一般的にはダーウインの進化論といへば生存競争が想起されるが、実は、ダーウインの主張にはそれとは異なる相互扶助に類する一面が含まれていたことを受けている。

また、北一輝は明治三九年五月に自費出版したものの、間もなく発禁処分を受けた著書『國體論及び純正社會主義』でダーウインとクロボトキンの関係を以下のように位置づけている。

ダーギンによりて悪魔の如く響きたる生存競争説は、終にクロボトキンに至りて相互扶助の発見となれり。即ち是れ個体の高き階級たる社会を単位とせる生存競争にして、古来の漠然たる道德的意識に明確なる科学的根柢を与へたる者なり。

ここには、ダーウインの主張を優勝劣敗に帰着する生存競争説として捉え、それとは対蹠的に、クロボトキンの相互扶助説を道德意識を支える科学的根柢を提示したものととして対置させる認識がある。こうしたクロボトキンによる相互扶助の考えは、幸徳、石川、北よりも早く、既に明治三七年の時点で西川光二郎によって発せられていた。西川は、『相互扶助論』の一部を「動物界に於ける相互補助（上）（下）」（『週刊平民新聞』第三二・三三三号、明治三七年六月一九・二六日）、「未開人の間に於ける相互扶助」（『週刊平民新聞』第四六号、明治三七年九月二五日）で紹介している。なかでも、以下の内容が注目される。

其の（猿を指す——引用者注）仲間の中に病傷者が出来ると、死ぬか全快するまで必ず世話し、決して中途で其の者を危介扱にする様なことがない（隣人の餓死を坐視して平然たる今の人間は、実に遙に猿に劣つた動物である）

（中略）

斯く相互補助の事実及四個の教訓を述べ終りて後、氏は最終に叫んで曰く

耳を傾けよ、耳を傾けよ、山よりも野よりも森よりも又河よりも海よりも『故に結合せよ……相互補助を實行せよ』と云ふ声が聞えるではない乎

と、然かり自然は斯く吾人に教へつゝあるに、人間は何時まで過れる教に迷はされて不幸の下に泣かんとするのである乎
(完)⁽¹⁴⁾

ここにも、生存競争において劣勢にある者を切り捨てずに助けることに關して、人間は猿と比較にならない程退化しているとの認識がある。さらに、相互補助を實行しようとしないう人間に対する怒りが表明されている。これは、先に見た石川三四郎の認識に通じるが、石川の言が昭和二三年に発表されたのに対して、西川の認識は、小説「牛鍋」に先行して発表されている。この点を踏まえると、やはり先に述べたように、小説「牛鍋」の語り手の認識は、独自のものではなく、『相互扶助論』を媒介とした社会主義者たちの認識に通じる点があったと言える。

当時『相互扶助論』の受容に積極的に関わったのは、平民社の同人たちであった。堺利彦の企画によって実現した平民科学叢書では、その第四編として、『相互扶助論』第一・二章を翻訳した堺利彦編・

山川均述『平民科学第四編動物界の道徳』(明治四一年六月、有楽社)を刊行した。これは当初、幸徳秋水が翻訳を担当するはずだったものの、山川均が翻訳を代わったと言う⁽¹⁵⁾。その翻訳のあり方は、山川が、表現上は原文に忠実とは言い難いものの、思想の中心的な意味は原文に即していることを自認するものであった⁽¹⁶⁾。そして翻訳に当たって山川は、「社会主義の主張も亦、畢竟、社会組織に於ける、相互扶助の原則の恢復に外ならぬ⁽¹⁷⁾」と述べ、クロボトキンが説く相互扶助の思想と社会主義の主張は一致すると認識していたことを確認できる。

この書物で注目すべきは、次の一節である。

『生活は闘ひである』併し乍ら其闘ひは種族の内部の闘ひではなくて、外界に対する闘ひである。個々の動物の闘ひではなくて、共同の闘ひである。其武器は同僚の口から食物を奪ふ牙ではない。仲間を押除けて獲物に走る脚でもない。(中略)全て是等の闘争と競争とを避ける共同生活の習慣である。共通の正義の観念である。動物界の道徳——相互扶助である。

動物界の道徳は『競争する勿れ』である。(中略)固より此傾向は何時でも充分に実現せられては居らぬ。之に反して或る時は牙と爪との競争が現に行はれて居るが、然かも其競争の陰にも尚ほ此傾向は存して居る。

(中略)

『団結せよ、相互扶助を實行せよ！ 之こそ種族全体の為にも、銘々の為にも最大の安全を与へるものである。肉体上、精神上、道徳上の進歩の最良の保障である』之れ到る処、自然が吾々に教える処である。(中略)そして全ての動物界の進化の先登に立つて居る人間が、原始以来実行し来つた処である。そして最後に人間が、何故今日の地位に達することが出来たかと云ふ疑問に答へる、唯一の答案である。

「『団結せよ、』以降の内容は、西川光二郎が着目して紹介した内容とほぼ重なるが、この引用箇所には、競争を回避する意識・相互扶助こそが、人間を進化の最先端に位置づけた要因との認識がある。そして、その主張の裏にはやはり、人間の現状として相互扶助を充分には行えていないことへの憤慨がある。その相互扶助の傾向は、外界に対して種族が団結して闘う場合に發揮されるだけでなく、種族内で個々が闘うという、一見すると相互扶助から逸脱しているように思われる場合にも実は存在しているとす。

以上のように、管見の限りにおいて確認してみると、『相互扶助論』は、明治四〇年前後に社会主義者たちの間で、抑圧者が被抑圧者を虐げる生存競争に對置するものとして、なおかつ、社会主義が目指す方向性と一致する思想として捉えられていた。そして、相互扶助

を實踐しようとしないう人間に對して憤り、相互扶助の實施程度において人間は猿よりも遅れているとの見方を紡ぐ契機となつていたことが窺える。こうした社会主義者たちによる『相互扶助論』への反応を見ると、「牛鍋」に記されている助け合い、抑圧されている側の利をどれ程尊重できるかという問題は、クロポトキンをめぐる當時の言説に連なっている様相が見えてくる。

四

『相互扶助論』が明治四〇年前後の社会主義者たちにとって思想的支柱であつた様子は、如上のようなものであつたが、では、原書そのものにおける主張は、どのようなものであつたのか。相互扶助と「本能」との関係性と、貧困層における相互扶助のあり方の二点に焦点化して検討したい。訳文は、大杉栄が大正六年一〇月に春陽堂より刊行した『相互扶助論—進化の一要素』を用い、必要に応じて大沢正道による翻訳「相互扶助論」(『クロポトキン』昭和三十九年四月、三一書房)を参照した。

第一に、「本能」に関して、クロポトキンは以下のように述べている。

近所に火事のある時、吾々が手桶に水を汲んで其の家に駆けつけるのは、隣人しかも往々全く見も知らない人に対する愛か

らではない。愛よりは漠然としてゐるがしかし遙かに広い、同心又は社会心の感情若しくは本能が、吾々を動かすのである。動物に於ても亦同様である。(中略) これ実に愛や個人的同情よりも遙かに広い感情からである。極めて長い進化の行程の間に動物と人類との社会に徐々として発達し来たつた一本能からである。

(中略)

しかし社会が人類の間に依つて以て立つ基礎は、愛でもなく、又同情でもない。それは人類共同の意識、よしそれが僅かに本能の域にとどまつてゐるとしても、兎に角に此の意識の上に基づくものである。相互扶助の実行によつて得られる勢力の無意識的承認である。各人の幸福がすべての人の幸福と密接な関係にある事の無意識的承認である。又各個人をして他の個人の権利と自己の権利とを等しく尊重せしめる、正義若しくは平衡の精神の無意識的承認である。此の広大な且つ必然的な基礎の上、更に高尚な幾多の道徳感情が発達する。⁽¹⁹⁾

困難に直面する他者を助けようとする行為は、「愛」や「個人的同情」に由来するのではなく、それよりも広大な「共同心」「社会心の感情」「本能」に起因するとクロポトキンは、主張する。この「共同心」「社会心の感情」「本能」をクロポトキンは「相互扶助」と呼

び、生物が長大な時間をかけて発達させてきた後天性を帯びたものであると言う。この「相互扶助」という「本能」の発達の過程をクロポトキンは、自然にすなわち環境の要請によつて受け入れてきた、という意味で「無意識的承認」と述べる。このような発達過程によつて培われた連帯感・連帯意識とも言ふべきものが基盤となつて、一人の幸福と全体の幸福とを密接に結びつけるようになり、他者の権利を自己の権利と同等に是認する道徳が打ち立てられるようになった、とクロポトキンは主張する。

第二に、貧困層における相互扶助に関して、クロポトキンは以下のように述べている。

今日の社会組織の下では、同じ街又は同じ近所のもの同士の間の縁は総て断たれて了つた。大都会の富裕な街では、直ぐ隣りの人をも知らずに生活してゐる。しかし貧乏人の街では、皆んながよく知り合つてゐて、始終互に接触してゐる。勿論、此の貧乏人街にも、他の街に於けると同じく、争ひの起る事はある。けれども何かの類縁による結合が発達してゐて、其の結合の中には富裕階級の思ひも寄らない程の相互扶助が行はれてゐる。

(中略)

母親達は互にいろいろな方法で助け合ふ。他人の子供の世話

をする。金持階級の女が、道で飢え慄えてゐる子供の前を平気で通る事が出来るのは、何かの教養があるからである。尤もそれが善い教養か悪い教養かは、彼女自身が決めるがいい。しかし貧乏人階級の母親にはそんな教養はない。飢え渴えてゐる子供を見て平気ではゐられない。何かしら食べさせてやらなければ済まない。そして食べさせてやる。⁽²⁰⁾

ここで、クロボトキンは、貧困層と相互扶助が、富裕層とは比較にならない程密接に繋がっていることを提示する。その一例として自らも貧困のうちに生きる母親が、お腹を空かした他人の子供に食べものを与えなければ気が済まない様子を挙げる。

このように、『相互扶助論』における「本能」と「相互扶助」に関する考えを検討してみると、相互扶助の行為は「本能」に起因すること、貧困層においてより頻繁に相互扶助が行われていること、この二点が主張されていることを確認できる。それゆえ、小説「牛鍋」が有する、下層社会における「本能」の争いと助け合い、被抑圧者の尊重というべき「本能」の一側面の提示という特徴は、『相互扶助論』の内容に通じる点があると捉えられる。

五

それでは、鷗外は、小説「牛鍋」を執筆当時『相互扶助論』を読

んでいたのであろうか。『相互扶助論』に関する言及は、時期的に少し下った大正九年一月一日付の賀古鶴所宛書簡に見られる。そこには、次のように記述されている。

今日ハ森戸辰男ノ事件ガ新聞ニ出候。森戸ハロシア人侯爵
クロボトキンノ思想ヲ研究シテ発表シタノガ悪イト云フノダ。
此人ハシベリヤヲ視察シタトキヨリ

動物ハ互ニ助けアフ性質（タガヒノタスケ）（mutual aid）ヲ有ス

ト云フ説ヲ唱ヘタアキンノ生存競争ノ向フヲ張り居ル相当ノ
学者ダ。⁽²¹⁾（中略）ソレガ無政府共産主義ノ宣伝者ニ加ハツタ。
ソシテ曰ク。

アル国ニ米ガ何程カアルトスル。ソシテ人ガ何人カ居ルト
スル。スルト誰デモ其米ヲ取ツテ 食ツテ差支ナイ。力一
パイ働イテ居ル上ハ米ヲ取ツテ食ツテ好イ。代ヲ払フニ及
バヌ。（共産主義）ソレニ代ヲ払ハネバナラヌ一ニナツテ
居ルノハ現在ノ秩序ノオカゲデ、此秩序ハ破壊ヲ要スル。
官民トカ貧民トカ

森戸ハコレニ賛成シタノカ、ドウカ知ラナイ。賛成シタトス
ルト悪ク云ハレテモシカタガナイ。シカシ相互扶助論ハ部分的ニ一
顧スル價ガアル。

この書簡に出てくる「森戸辰男ノ事件」とは、次のようなものである。東京帝国大学経済学部助教授の森戸辰男が、「クロポトキンの社会思想の研究」と題する論文を『経済学研究』に発表したところ、右翼団体の興国同志会によって危険思想視され、また当時の政府からも問題視されて、結局大正九年に、森戸と掲載誌の発行人兼編輯人の大内兵衛が起訴され、休職処分ならびに有罪判決が下された事件である。この森戸事件に関した書簡で、鷗外は、クロポトキンを「相当ノ学者」として評価する。その思想については、米の分配法を具体例に挙げながらクロポトキンが支持する共産主義、無政府主義の特徴を説明し、鷗外自身は共鳴できない旨を記している。しかし、「互助論ハ部分的ニ一顧スル價ガアル」とも述べ、相互扶助の思想については限定的に評価しているのである。ということは、鷗外は、大正九年時点では『相互扶助論』を読んでいると考えられる。そして、「mutual aid」^{タガヒノタスケ}と英語表記をしていることから、読むとしても英語による原書を読んだことが推測できる。ただし、稿者が確認した限りでは、鷗外文庫には『相互扶助論』は所蔵されていないようである。また、クロポトキンという人物に対する記述は、小説「沈黙の塔」(明治四三年一月)、「食堂」(明治四三年二月)などに確認できるため、明治四三年時点では鷗外がその名を把握していたことは確かなものの、鷗外が小説「牛鍋」の執筆ときに『相互扶助論』を読了していたことを示す直接的証拠を挙げることはで

きない。その他に、鷗外に関わりがあると思われる当時の状況として、日記の明治四三年三月七日以降に、山縣有朋が主宰する社会運動についての私的研究会「永錫会」の名が見出せる。その山縣は、明治四〇年一月三日の天長節事件の背後に幸徳秋水の存在を見ていた。²²その幸徳は先述したように、明治四二年九月二二日発行の『時事新報 文藝週報』第一七六号に「Mutual Aid. P. Kropotkin」を提示している。あとは、周知のことではあるが、大逆事件の被告人の弁護を担当した平出修は、鷗外から無政府主義や社会主義の思想について教示を受けている。²³こうした状況を鑑みると、時期的にずれはあるものの、鷗外がこの小説を執筆している際には、『相互扶助論』を読んでいた可能性はあると考えられる。

ところで、クロポトキンは、『相互扶助論』「序論」において「大多数の進化論者が(尤もダーウィン自身は必ずしもさうではなかつた)生存競争の首要特質であり進化の首要要因であると見做してゐる、彼の「同一種に属する動物間の」生存方法の為めの激烈な闘争」²⁴と述べ、ダーウィンすなわち生存競争説とする捉え方が多いことに対して、違和感を表していた。同じく『相互扶助論』「序論」においてクロポトキンは、自然界には相互闘争の法則と相互扶助の法則があるものの、後者をより重要視した、ケスレルの講演「相互扶助の法則に就いて」に感動しながらも、その主張はダーウィン「人類の進化」(The Descent of Man) (以下「人間の由来」と記す)における主張

をわずかに敷衍したのに過ぎないとも捉えていた。このように「相互扶助論」にはダーウインの学説、殊に『人間の由来』との関連性を確認できる。その『人間の由来』ならば、鷗外はドイツ語に翻訳されたものを所蔵していた。ちなみに、丸善の広報誌である『學燈』において明治三五年に実施された「十九世紀に於ける欧米の大著述」のアンケート⁽²⁵⁾によれば、『種の起源』が三二票を獲得して最高位となり、『人間の由来』は七票という一〇番目の獲得数であった。⁽²⁶⁾また、明治四二年に『時事新報』が行った「内外百書選定」においては、『種の起源』が五一点を獲得して二三番目に位置づけられ、『人間の由来』は一六点を獲得した。⁽²⁷⁾こうした回答結果を踏まえると、『人間の由来』を含めたダーウインの主張が明治後期の識者たちに支持されていたことが見てとれる。その『人間の由来』において、ダーウインは相互扶助に類する作用についてどのように述べているのか。「第一部 人間の進化 第三章 人間と下等動物の心的能力の比較について(続き)」⁽²⁸⁾には、「前2章の要約」として次のように記されている。

道徳感情はおそらく、人間と下等動物とを分ける最良で最大の違いである。しかし、この問題については、ここではもう何も述べる必要はないだろう。つい先ほど、人間の道徳的性質の基本原理である社会的本能が、活発な知的能力の助けと習慣の影響を受ければ、ごく自然に、「汝が他人にしてもらいたいと

思うことを、汝も他人に対してなせ」という黄金律に導くことを示したばかりだからだ。そして、このことは、道徳の根源に横たわるものである。⁽²⁹⁾

ここから窺えるダーウインの認識は、道徳的なるものを支えている根本にあるのは、「社会的本能」だということである。そして、道徳的な状態を、他者の利益を自己の利益と同様に重んじ、その他者の利益のために奉仕することと捉えている。ということは、ダーウインがここで言う「社会的本能」に基づく「道徳的」な状態とは、クロポトキンの言う「本能」が生み出す「相互扶助」的な作用とほぼ同質と捉えてもよいと考えられる。なぜなら、クロポトキンが、相互扶助の作用を生み出す要因と認定した「本能」は、先に検討したように、「各個人をして他の個人の権利と自己の権利とを等しく尊重せしめる、正義若しくは平衡の精神の無意識的承認」とも言い換えられており、これは、ダーウインがここで説く、「社会的本能」が導く「汝が他人にしてもらいたいと思うことを、汝も他人に対してなせ」という黄金律」とほぼ同義と言えるからである。よって、小説「牛鍋」において「本能」には被抑圧者の利を尊重する一面があるという認識に通じる内容が、鷗外の所蔵していた『人間の由来』にも見受けられると言うことができる。

小説「牛鍋」が、下層社会における「本能」の争いと助け合いを

描いた小説と捉えられることは、先述したとおりである。いま一度確認すると、この小説において、男と女と女の娘は、経済的格差がありながらも、いずれも下層社会に属していると考えられた。そして、徐々に経済力を身につけつつある男が、亡夫と友人であったよしみで、その妻とその幼い娘に、牛鍋をご馳走しようとしていると考えられた。三人で牛鍋を食べるという場を作った点においては、

「この男の意識と行為には、『相互扶助論』で述べられていたような下層社会における被抑圧者への相互扶助に類する働きを見出すことができる。さらに、この小説の語り手は、抑圧されている側の利益を尊重する一面が「本能」にはあると考え、そこに価値を見出していた。これは、相互扶助は「本能」に起因すると説くクロポトキンの思想と重なりと見られる。また、明治後期に支持され、鷗外自身も所蔵していた『人間の由来』には、相互扶助に類する作用が「社会的本能」に由来する旨が記されていた。このような小説「牛鍋」の内部と外部の状況を踏まえると、この小説は、当時の社会思想を視野に入れて成立していると言つてよい、と考える。その上で注意しなければならないのは、この小説において男は、抑圧されている側を支えようという意識とは裏腹に、女の娘が肉を食べようとするのを大抵は妨害し、女の食欲を完全に封じ込める程の抑圧を加えていたという実態である。

下層社会において、被抑圧者を支えようという意識を有すると考

えられながらも、相手を抑圧してしまう男のありようを描出する小説「牛鍋」とは、これまで見てきた『相互扶助論』の主張や当時の社会主義者たちの受容の仕方を踏まえると、『相互扶助論』を論拠に社会主義者たちが相互扶助の実践を説くことに対して、相互扶助は下層社会における重要な問題であったとしても、それを完全に実行することはなかなか困難であることを突きつけて警鐘を鳴らした小説と言うことができる。

注

- (1) 霹靂火「二月の小説界」(『国民新聞』明治四三年一月一四日)
- (2) 三好行雄「牛鍋」(『國文學』第一八卷第一〇号、昭和四八年八月)。引用は『三好行雄』金鷄叢書5 鷗外と漱石明治のエーロス(昭和五八年五月、力富書房)。以下、本稿で引用した三好の見解はすべてこの文献に基づく。
- (3) 『シンポジウム日本文学13 森鷗外』(昭和五二年二月、學生社)
- (4) 竹盛天雄「鷗外 その耀き 11 自我―屈折と明視」(『早稲田文学』第二三号、昭和五三年四月)。引用は、『木精』と『牛鍋』、『電車窓の実験』(竹盛天雄「鷗外 その紋様」昭和五九年七月、小沢書店)。以下、本稿で引用した竹盛の見解はすべてこの文献に基づく。
- (5) 小泉浩一郎「森鷗外「牛鍋」」(『國文學』第二九卷第三号、昭和五九年三月)。以下、本稿で引用した小泉の見解はすべてこの論文に基づく。
- (6) 有賀ひとみ「森鷗外『牛鍋』の再解釈―「渴してゐる目」の真意―」(『国文目白』第五一号、平成二四年二月)。以下、本稿で引用した有賀の見解はすべてこの論文に基づく。

- (7) 『臨時増刊 風俗画報』第一四一号(明治三〇年五月二十五日)「新探東京名所図会 第五編」には、「池の前 猿店の図」が掲載されている。また、「猿店」については、「公園一号地池の前に在り、店頭には獼猴十数疋を鉄鎖に繋ぎ、袖なしの衣裳着せて笑止や芸無猿の共進会とは、隣りの洋犬芝居見た人の評言ともあるへしや(中略) 嬬あり娘あり人參を刻み餌柄杓に盛り「お猿に與て下さい」と勧誘むるこれも商業ぞかし、子供連れたる親達の終日此所に群集し餌を投ずれば、猿はいつも食傷すべし」とある。
- (8) 『大杉栄全集 第10巻』(平成二七年七月、ぼる出版)における山泉進「書誌解題」を参照した。
- (9) 注8に同じ。
- (10) 『時事新報』文藝週報』第一七六号(明治四二年九月二二日)『時事新報』文藝週報』第一六五号(明治四二年七月七日)
- (11) 『大杉栄全集 別巻』(平成二八年一月、ぼる出版)
- (12) この引用箇所を含む石川三四郎の自伝は、『週刊 平民新聞』(昭和二年五月〜二月)に二五回にわたって掲載され、昭和三年二月にソオル社より三〇〇部限定で『浪』として出版された。引用は、『日本人の自伝10 自叙伝抄・浪』(昭和五七年六月、平凡社)。
- (13) 『動物界に於ける相互補助(下)』(『週刊 平民新聞』第三三三号、明治三七年六月二六日)
- (14) 『動物界の道徳』(明治四一年六月、有楽社)の「第四篇はしがき」を参照した。
- (15) 注15に同じ。
- (16) 注15に挙げた文献より引用。
- (17) 引用は、『大杉栄全集 第10巻』(平成二七年七月、ぼる出版)による。
- (18) 『クロポトキン全集 第七巻』(昭和三年、春陽堂)によれば、本稿で用いた大杉栄訳は一九〇七年版を原本にしているとのことである。しかし、その版を確認することができなかった

ため Peter Kropotkin, *Mutual Aid: A Factor of Evolution*, London: William Heinemann, 1903. を用いて、邦訳に該当する原文を以下のように引用する。

It is not love to my neighbour — whom I often do not know at all — which induces me to seize a pail of water and to rush towards his house when I see it on fire; it is a far wider, even though more vague feeling or instinct of human solidarity and sociability which moves me. So it is also with animals. ... It is a feeling infinitely wider than love or personal sympathy — an instinct that has been slowly developed among animals and men in the course of an extremely long evolution, ...

... But it is not love and not even sympathy upon which Society is based in mankind. It is the conscience — be it only at the stage of an instinct — of human solidarity. It is the unconscious recognition of the force that is borrowed by each man from the practice of mutual aid; of the close dependency of every one's happiness upon the happiness of all; and of the sense of justice, or equity, which brings the individual to consider the rights of every other individual as equal to his own. Upon this broad and necessary foundation the still higher moral feelings are developed.

(20) この邦訳に該当する原文は、以下のとおりである。引用は、注19に挙げた一九〇三年版による。

Under the present social system, all bonds of union among the inhabitants of the same street or neighbourhood have been dissolved. In the richer parts of the large towns, people live without knowing who are their next-door neighbours. But in the crowded lanes people know each other perfectly, and are continually brought into mutual contact. Of course, petty quarrels go their course, in the lanes as elsewhere; but groupings in accordance with personal affinities grow up, and within their circle mutual aid is practised to an extent of which the richer classes have no idea.

- … In a thousand small ways the mothers support each other and bestow their care upon children that are not their own. Some training — good or bad, let them decide it for themselves — is required in a lady of the richer classes to render her able to pass by a shivering and hungry child in the street without noticing it. But the mothers of the poorer classes have not that training. They cannot stand the sight of a hungry child; they *must* feed it, and so they do.
- (21) ダーウィンの生存競争説とクロボトキンの相互扶助説を対置させる認識は、鷗外だけではなく先に引用した北一輝などにも見受けられたが、この書簡が書かれてから約三ヶ月後の大正九年四月に刊行された『中央公論』第三五年四月号に「生存競争説と相互扶助論」と題する特集が掲載されている。その執筆者である三宅雪嶺、杉森孝次郎、堺利彦、木村久一、石川千代松の間にも、ダーウィンとクロボトキンを対置させる認識があることを確認できる。
- (22) 絲屋寿雄『叢書 現代の社会科学 日本社会主義運動思想史』(昭和五四年六月、法政大学出版社)、右田裕規『天皇制と進化論』(平成二十二年三月、青弓社)を参照した。
- (23) 川並秀雄編『啄木 晩年の社會思想』(昭和二十二年六月、時論社)などを参照した。
- (24) 『大杉栄全集 第10巻』(平成二十七年七月、ぱる出版)
- (25) 『學燈』第五六〇五八号(明治三五年一月—三月)。「學燈」第五八号(明治三五年三月)に掲載された「十九世紀大著述選定の結果」には、このアンケートにおいて「七十有余氏の選定を請ふ」たことが記されている。司忠編『丸善社史』(昭和二十六年九月、丸善株式会社)によると、「知名の学者七十八氏よりの回答を得た」ということである。
- (26) この『學燈』におけるアンケート結果については、注25に挙げた司忠編『丸善社史』(昭和二十六年九月、丸善株式会社)

を参照した。

- (27) この『時事新報』によるアンケート結果については、『時事新報 文藝週報』第一八三号(明治四二年一月一日)を参照した。
- (28) 『人間の由来』の邦訳は、チャールズ・ロバート・ダーウィン著・長谷川眞理子訳『ダーウィン著作集1 人間の進化と性淘汰』(平成二十一年九月、文一総合出版)より引用。注28に同じ。なお、参照した邦訳は横書きで、読点ではなくカンマが用いられている。そして、引用した「人間の道徳的性質の基本原理である社会的本能が」の部分に肩番号「39」がついており、「The Thoughts of Marcus Aurelius, &c.p.139」という注がついている。また、この引用箇所該当する鷗外所蔵本 Charles Darwin/David Haek, Die Abstammung des Menschen und die Zuchtwahl in geschlechtlicher Beziehung, Leipzig o.J.における原文を引用すると、以下のようになる。
- Der moralische Sinn bietet vielleicht die beste und höchste Unterscheidung zwischen Mensch und niedrigen Theren; allein ich brauche hierüber nichts mehr zu sagen, da ich vorher erst bemüht war, zu zeigen, daß die geselligen Instinkte — das erste Prinzip der moralischen Konstitution des Menschen¹⁾ — mit Hilfe der regen intellektuellen Kräfte und der Wirkungen der Gewohnheit, natürlicherweise zu der goldenen Regel führen: „Was du willst, daß andere an dir thun, das thue auch an anderen“ — und die ist der Grundstein der Moral.

〔付記〕 「牛鍋」本文の引用は、『鷗外全集第六巻』(昭和四七年四月、岩波書店)による。その際、旧字体は新字体にし、ルビは適宜省略した。